２期生教育コース通信

第１号（２０２０．６月）

６月に入って学校が始まり、生徒たちはやっと学校生活に慣れてきたところです。昨年度は愛知教育大学・日本福祉大学の先生方から講義をしていただいたり、半田市内小学校の学習ボランティアに参加したり、授業参観をさせていただいたりという様々な活動をしてきました。その中で、新しい経験をさせていただいただけでなく、児童との関わりや授業の方法など、「教師として学校で働く」とはどういうことなのかを考えることができました。

今年度はまだ、大学での対面による講義が許されていない状況が続いています。そうした状況下ですが、日本福祉大学の教授にご協力をいただき、今年度最初の「教育探究Ⅰ」の講義をいただきました。YouTube にアップされた動画を生徒それぞれが見るというものではありましたが、「インクルーシブ教育」について学びました。「子どもを理解する」ことについて事前課題で考え、講義の中で特別なニーズのある子に対しての接し方や学習の仕方の大切さを学びました。多くの生徒から、今井先生の話の中にあった「困った子」＝「困っている子」という考え方が印象に残ったという声が聞かれました。

★　科目　　「教育探究Ⅰ」

★　内容　　「インクルーシブ教育」　日本福祉大学　子ども発達学科　　今井理恵　准教授

＜生徒の感想文より＞

ひとりひとりの話を聞いてあげて、その子のニーズをできるだけ考慮してあげることを忘れないようにしたい。「このぐらいできるでしょ」という言葉を、困っている子に使わないようにしたい。

この講義を最後まで見て、「ひとりひとりを見て適材適所に」というのが、私が考えたことだ。部活動でも、部長としてもっとまわりを観察して部活動を運営していこうと思った。

障がいにはいろいろな種類があることがわかりました。自分のクラスに聴覚障害がある子どもがいる可能性もあるので、少し手話を練習してみたいと思いました。

まず、自分にも当てはまるところがあった。自分は熱くなると自分を止められないところがあり、苦い経験をしてきた。この動画を見て、考え方を変えればポジティブになれるかもしれないとわかった。

今までの僕は、「障がいを持った人を受け入れる」という考えでしたが、これからは自分が積極的に関わって「居場所を一緒に作る」ことをしたいと思いました。

人間の行動には必ず「わけ」があるということがわかった。その「わけ」を感じられるような教師になるため、高校生の今から相手の「わけ」を理解するよう努めていきたい。

今まで心のどこかで、障がいのある人に対して「かわいそう」という気持ちをもっていましたが、それを恥ずかしく思いました。僕は差別をなくす教員になりたいので、考えを改めたいと強く感じました。